

## 漁況海況予報事業\*

阪本俊雄・中地良樹・武田保幸・檜山晃晴  
渡辺勇二郎・調査船「わかやま」浜口英雄他六名

## 目 的

本県沿岸および同沖合の海況と本県沿岸の漁業の漁況をモニタリングして、海況と漁況に関する調査研究を行う。同時にこれらの情報を漁業関係者に報告して漁業経営の合理化に資する。

## 方 法

平成3年度漁況海況予報事業実施方針（水産庁）による。

## 結 果

和歌山県漁海況情報（第83～第94報、毎月）ならびに沖合黒潮調査速報（1991.No.4～11、1992.No.1～3）にすべて速報した。特徴的な海況と漁況の概要は以下のとおりである。

## 1 海況

潮岬沖合と紀伊水道（合ノ瀬）沖合の黒潮中心部位置は表1、潮岬沖合の黒潮の中長期的な変動は図1に示すとおりである。潮岬沖合の黒潮は1990年10月頃より接岸する傾向に転じ、'91年5月までは20～30湊、6～9月は10～15湊、9月末に遠州灘沖冷水塊は消滅、黒潮流路はようやくN型となり、'92年1月までは10～15湊ときわめて接岸、2～3月は20湊と若干離岸した。このような黒潮変動と連動して潮岬以西沿岸の海況は'91年前半に黒潮北側の中層顕著湧昇により低温化、後半は振り分け潮により高温化した（図1下図）。後半のこのような異常接岸は上記のように強い振り分け潮を形成し、紀南沿岸は下り潮となり沿岸漁場域は直接黒潮に洗われた。また紀伊水道域では黒潮系水が水道中部まで影響して冬期の水道フロントは北上して形成された。一方熊野灘では黒潮のC、N型流路を反映して北上、南下双方の暖水波及は発達せず、中層顕著湧昇によって低温化した。図2は潮岬の東西を比較したもので、同岬西側域と熊野灘側の檜野埼沿岸における水温変化であり、これの東西差は明瞭である。なお紀伊水道の暖水波及は4月の中旬に起こったものが特に大きく、大阪湾にまで直接及んだ。

## 2 漁況

内海マダイ 加太、'91年は過去の最高漁獲であった'81年とほぼ同じ98 t。'92年1～3月も暖冬

\*漁海況予報事業費による。「平成3年度漁況海況予報事業結果報告書」として既報。

影響で好調。従来の黒潮接岸は不漁、離岸は好調の傾向パターンは崩れ、後半の増加は顕著。

内海マダコ 加太、'86年の123 tから'87、'88年と減少して'89年には54 tとなったが'90年は81 t 本年は91 tに回復。

サワラ 4月中旬の紀伊水道への大暖水貫入により水道北部前線域で活況がみられたが貫入勢力が強く漁は長続きしなかった。冬期の水道南部サワラ漁は黒潮系水で覆われ全くの不漁。

タチウオ 上記の4月の暖水貫入により外域からの来遊がみられたが、5、6、7月と安定した黒潮系暖水の貫入はなく底層水温は18℃未満に低下して補給は断られた。'90年10月の接岸で補給された小タチは'91年冬春期に多く、これが8、9月に中タチとして漁獲に現れたが、10月以降は大、中、小とも極めて不振。10月以降の秋期に小タチウオが増加するのは従来からの傾向であるが、本年は全くこの傾向は崩れ増加しなかった。内海の暖冬影響か。最近年のたびたびの黒潮接岸は春仔群資源復活を思わせるふしが漁期と魚体組成の変化にみられたが、海況不安定でなお本種資源は低い水準にある。

シラス 本年の漁は'90年よりもかなり上廻ると予想されたが、前述の4月の大暖水波及と共に起った春期マシラス補給の跡絶え（東海方面も同時的）により田栖川・南部町漁協は減少した。箕島町・西脇漁協は夏秋期漁により年計では増加した。

イカナゴ '92年冬期（2月）は黒潮接岸によりかつてない好漁。過去の好漁年'88、'89年はいずれも黒潮接岸年。

内海マサバ・マルアジ マサバは8月までまづまづであったが、同月末に黒潮の若干の離岸により外域にすべて移出。以後全く水道内への来遊はなかった。冬期の水道南部のマサバ釣は'89、'91年のように活況を呈したわけではないが、黒潮接岸を反映して漁場形成があった。

外海アジ、サバ、イワシ類 本年のまき網漁は2そうまきのマサバは8、9月の漁でマルアジは5月の漁でそれぞれ増加。マアジは前年の2、3才群が漁獲対象外資源となったために減少。1そうまきでは、マサバ、マアジが熊野灘での当才、1才群により、またウルメ大羽群は黒潮接岸による水道沖合の好漁場形成によってそれぞれ増加。2そうまきマサバは前述の8月末の黒潮の若干の離岸による内海群の外域（瀬戸崎）への移出が端初でその後9月に入っても「すさみ」沿岸でかなりの滞留を持続した。ここでの漁場形成は従来全く例をみないものである。マルアジは内海入り込み期に当り、漁場は水道入口前線域、黒潮は潮岬南沖20～25マイルと若干離岸ぎみで底層低温化、浮上群をねらった昼巻操業が主体だった。1そうまき網は'90年よりも増加したとはいえ、稼働統数は最近減少しており'87年以前は約2,000日・隻であったものが本年は1,000日・隻を切って'80年代前半のような高い漁獲を上げることは困難となった。

棒受ウルメ 串本漁協では黒潮の接岸で下り潮極めて強く、海況、漁況は'89年と類似の大不漁年。南部町漁協では前述のマサバ漁況に作用した8月末から9月の海況変化が影響して例年より1ヶ月早く9月上旬に終漁。本年はさほどの不漁でもなかったが、黒潮が接岸過程にあった'90年に比べて約100 tの大幅な減少。熊野灘は暖水波及なく不漁。

サンマ 10月下旬に例年にみられない早い来遊。年内は黒潮接岸の塞き止め効果により約400 tの好漁年となった。32～33cmの大型群。'92年冬期は2月にトンボ曳縄漁に代ったために1月では

ぼ終漁。

スルメイカ 黒潮がきわめて接岸したため紀南沿岸漁場は直接黒潮に洗われ漁場形成全くななく大不漁。

カツオ 黒潮の接岸で'86、'89年に次ぐ好漁となった。本年が上記両年に及ばなかったのは黒潮水温が例年より高く、4月から21℃以上となり19～21℃の適温域は沿岸に限られ漁場が狭かったためである。秋カツオは10、11月に来遊。

トンボ '92春期は黒潮がきわめて接岸したためかつてない好漁となった。3月までの漁持続は特異的。

メジロ 11、12月に活況を呈していた近年のパターンとは異なり、紀南域へは例年より早い9月に来遊、11月上旬で漁切れる。不漁。

ブリ 2月の日本海低気圧と黒潮の潮岬塞き止め効果により宇久井と太地で8,700余本。1～3月の累計では10,000余本とここ5、6年では最も漁獲が多かった。

その他 串本トビウオ刺網は黒潮接岸で漁期は4～11月と長く、140tの近年では最も高い漁獲となった。

### 3 沖合・沿岸・浅海定線調査報告、海況・漁況情報の発行

#### 1) 沖合・沿岸・浅海定線調査報告

主な配布先 水産庁、水産研究所(南西、中央他)、都道府県水産試験場、気象庁、漁業情報サービスセンター、水路部

発行部数 沖合定線報告 45部

沿岸・浅海定線報告 55部

南西海区水産研究所外海調査研究部に所定の海洋観測入力様式「POD」にてデータを入力したフロッピーディスクで報告した。

#### 2) 海況・漁況情報の発行

a) 海況速報 漁業情報サービスセンターからファックス受信した海況速報はすべて、県下関係漁協に直ちにファックス送信。

b) 人工衛星利用沿岸海況図 サービスセンターから受信後、利用価値のあるものは県下関係漁協にファックス送信。

c) 南西東海海域海況速報 上記a)、b)と同じくファックス送信。

d) 南西東海海域沿岸漁況情報 適宜業種別広域漁況を関係漁協にファックス送信(2～7月)

e) 沖合黒潮調査速報「わかやま」による本県沖合の黒潮とその内側域の漁場海況調査結果速報で関係漁協、関係機関にファックス送信。延12回。

f) 和歌山県漁海況情報(第83報～第94報) 和歌山県沿岸沖合を中心とする1ヶ月の海況と漁況及び資源の解説。

発行回数 月1回、1991年4月～1992年3月

主な配布先 水産庁、水産研究所(南西・中央)、都道府県水産試験場、県内全漁協、関係協力漁業者、その他関係者。

発行部数 200部

g) その他 毎週1回海況、漁況の新聞広報（週間南紀ウィークリー、紀伊民報等）  
 定地水温は毎日、気象協会を通じて広報（和歌山放送）。

表1 潮岬沖合と紀伊水道（合ノ瀬）沖合の黒潮中心部位置（正南距離， 湊）

月	1991.4	5	6	7	8	9	10	11	12	1992.1	2	3
潮岬 前半	15	20*	25*	15*	10	20	10	10	10	10	15*	20
	C	C	C	C	C	D	N	N	N	N	N	N
後半	25	25	15	15*	15*	15	10	15	10	15	15~20	15*
	C	C	C	C	D	N	N	N	N	C	N	N
合ノ瀬	35	50	50	—	40	50	—	35	40	—	40	60

\* 印は水路部海洋速報による

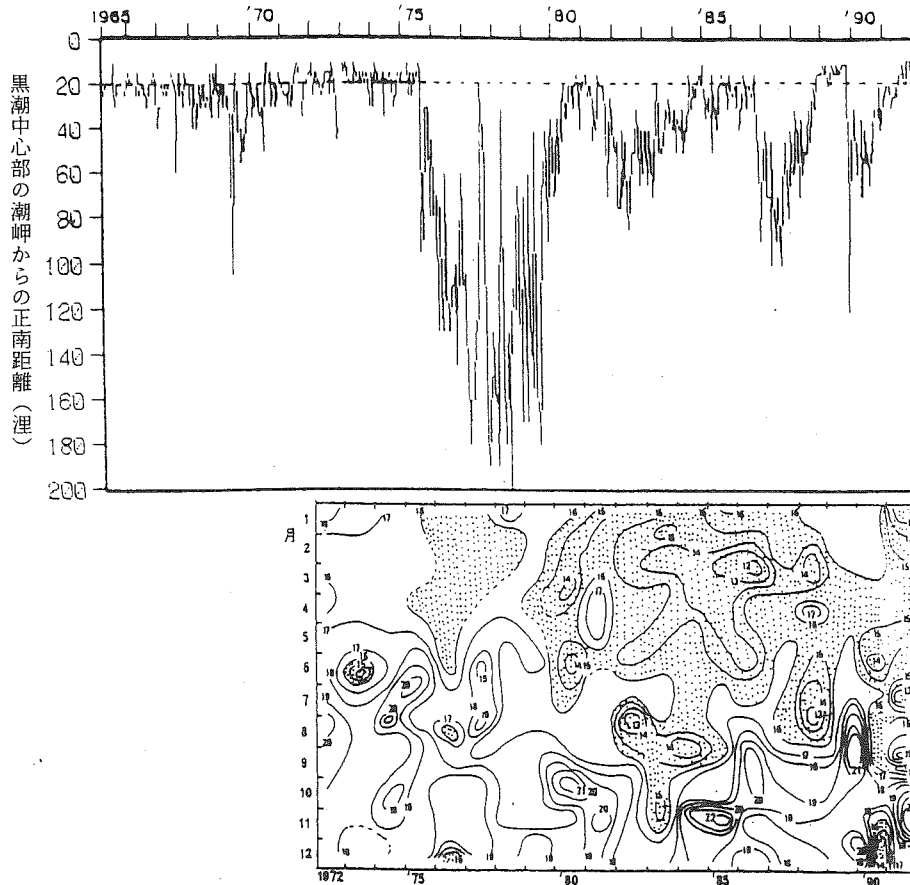


図1 潮岬沖合の黒潮中心部位置の変動（上図）と沿岸漁場水温（下図：瀬戸崎2湊、100m水温、 °C）

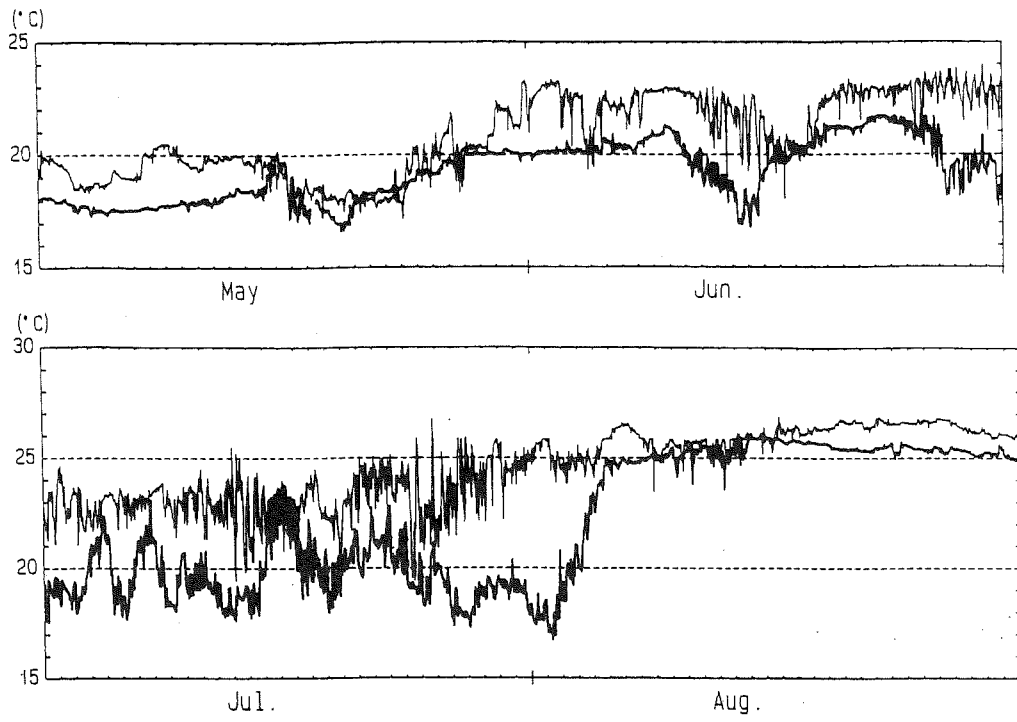


図2 1991年5～8月の紀伊水道側(細線:白浜椿)と熊野灘側(太線:檜野)の定置水温変動(10m)の比較